

— ノート —

ルーブリックを用いて大学生のプレゼンテーションを 評価する際に考慮すべきこと

福井 愛美

Considerations When Evaluating College Students' Presentations Using Rubrics

Aimi FUKUI

要 旨

大学教育において、学生がどの程度の学習成果を上げているかを測ることは重要である。しかし具体的にどのように評価を行うかは指導した教員にゆだねられており、ともすると主観的で不公平にもなりがちである。特に、明確に点数で評価することが困難なレポート課題やプレゼンテーション、プロジェクト演習のようなグループで取り組む課題の評価は評価者の主観が入りかねない。そこで教員が何を教えたかということより学生が何を学んだかということに視点をおいて達成水準を明確化した評価基準を作成することは評価を行う上で効果的であろう。

本研究では学生のプレゼンテーション発表の学習成果を測るルーブリックの私案を提示し内容の検討と今後の課題を述べる。

キーワード：プレゼンテーション、ルーブリック、学習成果の評価

1. はじめに

大学教育において、教授した内容がどの程度学生の身につけているのか、すなわち学習成果を適切に評価することは重要である。しかし重要だとわかっていても、具体的に何をどのように評価するのかということになると、その妥当な方法を考えることはかなり難しい。学習成果の評価はときにパフォーマンス評価とも言われるが、パフォーマンスには辞書にはいくつかの意味がある。ここでいうパフォーマンスとは、ランダムハウス英語辞典（第2版CD-ROM版）の掲載されている意味の中では、「(仕事・行為・功績などの) 達成, 成就, 実績, 成果: (作品・作物などの) 出来栄え, 巧拙, 手際:」である。もちろんパフォーマンスには上演や演奏、公演などの意味もあるので、大学教育に関して言えば、成果発表として行われるプレゼンテーションなどでは、プレゼンテーション自体の巧拙そのものも成果や達成のひとつとして構わないであろう。本来、研究発表のようなプレゼンテーションでは内容が大事であるのは論を俟たないだろうが、うまく見せることもまた重視されているからである。

さて、大学教育においてこれまで学習成果の評価がなされてこなかったのかと言えば、もち

ろんそのようなことはなく、成績をつけるという形で評価は行われてきているが、十分とは考えられていない。平成9年（1997年）の大学審議会答申「高等教育の一層の改善について」、平成10年（1998年）の大学審議会答申「21世紀の大学増と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学」以降、教育の質の保証のために成績評価の厳格化が必要であるということは指摘され続けている。平成10年の答申では、「第2章の1. 課題探求能力の育成—教育研究の質の向上—（2）学部教育の再構築」の中で、成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施について具体的に述べられている。さらに平成19年（2007年）の教育再生会議の報告には、教育の質保証ということが述べられており、翌20年（2008年）の教育振興基本計画特別部会（第13回）の議事録でも、高等教育期間における質の保証および向上について言及されている。そして同年の「教育振興基本計画の在り方について—「大学教育の転換と革新」を可能とするために—」では【質保証の体制】として、「学習成果」測定の開発・普及」として質の尺度の開発も挙げられている。測るためには適切な尺度が必要なのだが、その尺度がないということが問題のひとつと考えられている。

尺度を作成するためには、何を測るのかを明確にする必要がある。大学における学習成果の評価においては、測りたいものは教育によって学生が身につけたものであり、それを測定する道具として尺度が必要になる。よって学習成果を測るということを考えた場合、第一に、測りたいと考えている学習成果とは何かを明確に定義することが重要となる。松下¹⁾（2015）は、学習成果が注目されている背景には、教員が何を教えたか（と教員が考えている）ことが大事なのではなく、「学生が何を学んだか」に目を向けるという転換があったことを指摘している。さらにこの学生が何を学んだかとは、何を知ったのかという to know と何ができるようになったのか to do の二つを含んでいることも近年の傾向として挙げている。OECD ではこの学習の成果については、何ができるかについては、実際にやってみせる（demonstrate）という用語を用いていることを述べている。学士課程答申の用語解説²⁾（2008）ではこの demonstrate に当たる部分に、「行い、実演できること」と述べているので、言葉は異なるが、先のパフォーマンス（performance）ともつながるものであろう。そして、最後に、学習成果というと往々にして学習した結果を意味すると思われるがちであるが、もうひとつは教える側かつ評価する側が学生に対して何ができるようになって欲しいと期待しているのか、求めているのかを表すものも学習成果という言葉に含まれていると述べている。

2. 学習成果の評価とルーブリックの目的

このような学習成果を評価するには、何ができるようになったのかを実際にやってもらうことになるが、そのためには、まず何ができるようになって欲しいのかを明確に示し、その内容に沿って評価することが必要になる。

学習成果を測るためのツールは、いくつかの特徴もしくは条件を網羅している必要がある。このようなツールとしてアメリカにおいて開発されたものがルーブリックという形式である。中央教育審議会（中教審）の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」の用語集³⁾（2012）には「米国で開発さ

れた学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある」と書かれている。

この評価方法が適切である対象として、松下⁴⁾は「大学でよく使われるレポートとか卒業論文、プレゼンテーション、口頭試問、あるいはいろいろな形で行われるプロジェクト、美術系での卒業制作、あるいは教員養成系での模擬授業とか、法学部、法科大学院での模擬裁判など」を挙げている。ここで重要なのは、ルーブリックによる評価が万能ではないこと、むしろ他の評価方法と組み合わせて使用することが前提であるという点である。

これらのことを踏まえ、大学におけるパフォーマンス課題の1つであるプレゼンテーションについてのルーブリック案を提示し、その内容について検討したい。

3. ルーブリック案作成における観点

具体的なルーブリック案を作成するために、作成のための観点を整理しておくことにする。

先に述べたように、学習成果 (learning outcomes) には二つの側面がある。①最終的に何ができるようになっていなければならないのかを表す achieved learning outcomes と②何ができるようになることを求められているのかを表す intended/expected/desired learning outcomes である。この二つについては、ルーブリック自体を分けることで提示する方が望ましいと思われる。①を評価用ルーブリックと呼び、②を達成目標提示用ルーブリックと呼ぶことにしておく。そうすると、順番としては②が提示されて授業が行われ、その成果を①によって評価することになるので、順番としては、まず達成目標提示用ルーブリックを作成し、次に評価用ルーブリックを作成するのが手順として自然である。なぜならば達成目標提示用ルーブリックは測定する内容を定義するものであり評価用ルーブリックはその具体的尺度と位置づけられるからである。

プレゼンテーションの善し悪しは通常質的に評価されるものである。特に評価用ルーブリックはこの質的に評価される内容を、量的にとらえることを意識して作成する。これはルーブリックが本来そのようなものであるという意味ではなく、ルーブリックを使うことで質を量に置き換えて評価することが可能であるという側面を持っているので、そのように使用するということである。例えば美的センスを評価するような場合、経験を積んだ評価者は何を見ているのかということを示すという意味で、評価を可視化する役割を持つ。また量的に可視化することで、評価内容に対してある程度の説明責任を果たすために使用することが可能となる。さらに複数の判定者で評価が分かれた場合に、どこの評価がどのように分かれたのかを検討することが可能となる。

ルーブリックは一般に縦軸に評価する観点(項目)が提示され、横軸にその観定の達成度合いを表す段階(レベル)が提示される。そうして縦横のマトリックスのそれぞれのセルに、その具体的内容が記述される。本研究では縦軸に評価の観点すなわち評価規準(criteria)を配し、横軸に記述内容すなわち評価基準(standard)を配した形式を基本とした(表1)。

表1 評価用ルーブリックの基本形

評価項目	グレード1	グレード2	グレード3	グレード4
項目1				
項目2				
項目：				
項目n				

この形を評価用ルーブリックに用いる。これは松下⁵⁾の分類で言うならば、採点用ルーブリックに相当する。松下の用語と統一していない理由は、どちらも採点のために使用するという目的においては重なるが、分類の観点が異なっているためである。本研究では、評価用ルーブリックを、あくまでプレゼンテーションを評価するという内容の授業におけるプレゼンテーション評価のためのルーブリックという狭い意味で用いている。

もう一つの達成目標提示用ルーブリックは、表2のような形とした。

表2 達成目標提示用ルーブリックの基本形

評価項目	内容
項目1	
項目2	
項目：	
項目n	

これは評価用ルーブリックで提示された項目の内容を記述したものである。評価項目の意味するところを明示するものであり、学生にとっては具体的に何を評価されるのか、つまり何ができるようになることを期待されているのかが示されることになる。いわば評価項目の定義である。

4. ルーブリック案（私案）の提示

4.1 達成目標提示用ルーブリック

学術論文の発表のようなアカデミック・プレゼンテーションではなく、ここでは授業内で行っている一般的なプレゼンテーション、つまり大勢の前で口頭でのプレゼンテーションを行うと想定した場合の達成目標提示ルーブリックの例を提示する（表3）。この例は、筆者が学生のプレゼンテーションを評価する場合に、実際には何を見ているのかを内省し言語化したものである。よって私案であり、試案である。

表3 達成目標提示用ルーブリック

評価項目		内 容
発表態度		・背筋がよく伸びている・聴衆の方へ体を向けて話している・聴衆を意識しながら話している・にこやかな表情である・聴衆を見ながら話している・適度の緊張感もちながら話している・与えられた時間をフルに活用している・身振り手振りを交えながら話している・機器の操作を的確にこなしている・好感の持てる服装や身だしなみである
話し方		・滑舌がよい・大きな声で発表している・声がなめらかである・適度なスピードである・適切な間をとりながら話している・気持ちを表すイントネーションを工夫している・ぜひ注目して聞いて欲しいところは強調して話している・誰が聴いても分かることばで話している・自分のことばで話している・主語と述語の間隔を短く話している・時間配分を考えながら話している
構成内容	導入	・全体のテーマを説明している・目的が明確である・意図が説明できている・聴衆の興味を引くようなイントロが工夫されている・ユーモアを交えている
	展開	・導入・展開・結論と全体によくまとまっている ・意見とそれを裏付ける情報が論理的に展開されている・事実や事例が詳細である・簡潔に書かれている・分析が十分になされている
	結論	・結論がよく導き出されている・説得力がある
視覚資料 (パワーポイント)		・文字が適切なフォントで書かれている・イタリック体や太字などを使い見やすく工夫されている・グラフや図などが効果的に使われている・色使いが工夫されている・パラグラフが適切な長さである・空白スペースにイラストなどを入れて見やすくしてある・内容とマッチしている・適切なスライドの枚数である

4.2 評価用ルーブリック

次に評価用ルーブリックを提示する(表4)。

評価用ルーブリックには具体的な採点基準としての役割が必要であるので、達成目標提示用ルーブリックで定義した当該授業における評価項目を、より詳細に、かつ何ができているとどこまで達成したと評価されるのかのリストとなっている。一般的なルーブリックでは、評価項目(縦軸)とグレード(横軸)で構成されるセル一つ一つにその内容を表す記述語が記載される。本案ではあえて、一部をチェックリスト式にしている。これは評価項目の内容によっては、下位の評価段階から上位の評価段階に至る基準を、段階的直線的に記述できないこともあるということも考慮してのことである。例えば、先行研究に言及しているかどうか、という項目であれば、全く言及していない、から必要な先行研究を網羅している、まで評価基準を段階的に構成することが可能である。しかし、本案における視覚資料の項目では、適切なフォントの使用と適切なスライド枚数である、の二つの間に評価段階を設定することは無理である。このような場合は、その項目ができていると見なされる基準を複数提示し、そのうちいくつかできているかを評価する方が適切であると考えられる。必要であればチェック項目の重みを変えることでより重視している点と、さほど重視しているわけではない点を分けるという使い方も可能である。

表4 評価用ルーブリック

評価項目	1	2	3	4	
発表態度	<input type="checkbox"/> 背筋がよく伸びている（姿勢がよい） <input type="checkbox"/> 聴衆の方へ体を向けて話している <input type="checkbox"/> 聴衆を意識しながら話している <input type="checkbox"/> にこやかな表情である（表情が豊かである） <input type="checkbox"/> 聴衆を見ながら話している（原稿を使用していない） <input type="checkbox"/> 適度の緊張感をもちながら話している <input type="checkbox"/> 与えられた時間をフルに活用している <input type="checkbox"/> 身振り手振りを交えながら話している（直立不動ではない） <input type="checkbox"/> 機器の操作を的確にこなしている（スムーズである） 1：チェックが1個以下 2：チェックが3個以下 3：チェックが6個以下 4：チェックが8個以上				
話し方	<input type="checkbox"/> 滑舌がよい <input type="checkbox"/> 大きな声で発表している <input type="checkbox"/> 声がなめらかである <input type="checkbox"/> 適度なスピードである <input type="checkbox"/> 適切な間をとりながら話している <input type="checkbox"/> 内容によりイントネーションを工夫している <input type="checkbox"/> メリハリがある <input type="checkbox"/> 誰が聴いても分かることばで話している 1：チェックが1個以下 2：チェックが3個以下 3：チェックが6個以下 4：チェックが7個以上				
構成内容	導入	全体のテーマや問題設定が示されていない。	全体のテーマや問題設定が示されており，導入に工夫が見られる。	2に加え，テーマや問題設定が適切である。	3に加え，テーマや問題設定に独自性が見られる。
	展開	導入から展開への流れが繋がっていない。	導入から展開にかけての流れがスムーズである。	2に加え，根拠や事実が論理的に呈示されている。	3に加え，十分な分析がなされている。
	結論	結論が不明瞭もしくは導入・展開とつながっていない。	導入から結論に至る流れに大きな矛盾や飛躍がない。	2に加え，結論に説得力がある。	3に加え，結論に独自性が見られる。
視覚資料	<input type="checkbox"/> 適切なフォントが使用されている <input type="checkbox"/> イタリック体や太字などを使い見やすく工夫されている <input type="checkbox"/> グラフや図などが効果的に使われている <input type="checkbox"/> 色使いが工夫されている <input type="checkbox"/> パラグラフが適切な長さである <input type="checkbox"/> 空白スペースにイラストなどを入れて見やすくしてある <input type="checkbox"/> 内容とマッチしている <input type="checkbox"/> 適切なスライドの枚数である 1：チェックが1個以下 2：チェックが3個以下 3：チェックが6個以下 4：チェックが7個以上				

4.3 ルーブリックの得点化

プレゼンテーションを評価用ルーブリックで評価した後は、最終的に成績評価を付けることになる。学生からなぜ自分はC評価だったのかと問われた場合ある程度客観的に、または公平な観点からその理由を答える必要がある。ルーブリックの役割のひとつは恣意的または主観的判定を回避することにある。そこで得点化する場合にはどのようなことが考えられるかを検討する。

試案として評価用ルーブリックで評価項目が5つ、グレードを4段階としたものを想定した。各項目が全体の評価に占める割合を%で提示し、各項目のグレード3が最高達成状態であるとした。全体を100点満点とすると、項目毎の%によってその項目の最高得点が決定する。あとはグレード0, 1, 2に任意に得点を配分した(表5)。

表5

項目	配分	グレード0	グレード1	グレード2	グレード3
項目1	10%	0	5	7	10
項目2	10%	0	5	7	10
項目3	20%	0	10	15	20
項目4	40%	0	15	30	40
項目5	20%	0	6	12	20

このように得点を各セルで固定して、そこに丸が付けばその点を付与する。合計点が最終評価点となる。一方このようにセル毎の最高点を設定せず、あるセルに丸が付くことに何点を与えるかは提示しない方法も考えられる。得点化することを極限まで突き詰めてしまうと、たとえ一点足りなくても不合格ということも起こりうる。もちろん公平で客観的な評価ということ言えばそれが悪いとは言えないが、教育という点から考えると、いくらか考慮すべきことがあるように思われる。次に上記試案についての批判的検討を行い本私案における問題点を整理しておく。

5. 批判的検討

ルーブリックは質的評価を量的評価で行えるようにすることで、質的評価の価値を維持しつつ量的評価の客観性を組み込むという利点を持っている。これは有用なことではあるが、いくつか考えるべき点も含んでいると思われる。それは質を量で換算できるのか、もしくは質は量の総和で表せるかということである。例えばある絵画を素晴らしいと評価する専門家がいるとする。全体として素晴らしいという評価はいわば質的評価であるが、具体的にどういったところで素晴らしいと評価したのかを言語化したものが、ルーブリックにおける評価項目(評価規準)に相当する。そのときに色使い、構図、モチーフ、などが挙げられたとしよう。色使いについて、さらに細かく評価基準を記述していくとどうなるだろうか。最終的にどこまで行っても評価自体は主観であるということになるのではないか。このことは、ルーブリックを用いて、評価のぶれを少なくしようとしたときに生じる問題とも関連する。評価のぶれには二つのぶれが考えられる。ひとつは評価者個人内のぶれであり、もうひとつは評価者間のぶれである。プレゼンテーションを20人分見ている内に、最初と最後では評価基準がずれてしまうような経験はよくある。ルーブリックを用いることでこういった評価者個人内のぶれは比較的小さくできると思われる。一方それよりも難しいのは評価者間のぶれを小さくすることである。これは結局何をよいとしているかが主観的であることから解放されないことに一因があると思わ

れる。

プレゼンテーションで声の聞き取りやすさということを挙げたとしよう。少々極端な例だが、プレゼンターの声を器械で測定し、周波数や音量のような数値に置き換えて評価するということを考えてみよう。人間にとって最も聞きやすい周波数と音量がわかっているほどよい発声であるということになる。しかしこのような評価がプレゼンテーションにおける声の良さを適切に評価していると言えるだろうか。音質のようなものは、たぶん機械的には測定できないであろうし、聞き手の個人差も無視できないものであろう。これらの問題を解決するための工夫は今後も必要であると考えられる。

6. まとめ

本研究では、教育の質的保証のために導入されつつあるルーブリックについて、その役割について述べながら、プレゼンテーションを評価するという具体的な状況についてのルーブリック私案を提示し、さらに批判的に検討することを行った。実際に評価を行ったわけではないので、今後は実際に評価尺度として使用しその結果に基づいて検討する必要があるのはもちろんのことであるが、これまでの知見を踏まえ、考慮すべきいくつかの点について検討を行った。現時点での見解は、ルーブリック（特に評価用ルーブリック）は学習成果を測る方法及び観点のひとつであり、それですべて測れるわけではないこと、むしろ、測れない部分にも重要な教育的要素があることを意識して有効な使い方を併せて考える必要があるということである。ルーブリックの使用は、成績評価という、ともすると教員個人の聖域となるが故に主観的で不公平にもなりがちであった領域に一定の公明さを持ち込む有効な手段である。故に教員側にはなんとなく領域を侵されるように感じての感覚的な批判も多いのだろうが、学生にとって意味のある教育を考えるためには、その利点と限界をよく見極めながら有効活用する方法を考えていくことが大事であろう。

引用文献

- 1) 4) 5) 松下佳代, 「学習成果」の設定と評価—パフォーマンス評価を中心に— (2) 大学教育開発研究シリーズ NO22 「学習成果」の設定と評価—アカデミック・スキルの育成を手がかりに— 立教大学 大学教育開発・支援センター 19-38 (2015)
- 2) 中央教育審議会大学分科会 学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ) 用語解説 56 (2008)
- 3) 中央教育審議会 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) 用語集 39 (2012)

参考文献

- 1) 松下佳代, パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—京都大学高等教育研究第18号 (2012)
- 2) ダネル・スティープンス アントニア・レビ 佐藤浩章監訳 井上敏徳 俣野秀典訳, 大学教員のためのルーブリック評価入門 玉川大学出版部 (2014)
- 3) リンダ・サスキー 齋藤聖子訳, 学生の学びを測る アセスメント・ガイドブック, 玉川大学出版部 (2015)